人生を読み解く「ライフサイクル仮説」なるもの

人生はケセラセラ

学生時代に夢中になって読んだ小説の一つに、阿佐田哲也の『麻雀放浪記』があります。13 枚の牌が図示されているため、麻雀というゲームを視覚的に楽しめるというのも大きな理由の一つですが、それ以上に登場人物の圧倒的な人間くささや、敗戦直後の日本のいかがわしい雰囲気にひかれたように思います。特に印象的なのは最後の場面です。麻雀のメンバーの一人がゲームの途中で急死します。幻の役満をあがり、心臓発作を起こしたのです。他のメンバーは文字通り身ぐるみをはぎ、死体を川に放り込みます。その時のセリフが次のようなものです。

「死んだら負けだ。死んだら裸になるんだ」

小説の細かいストーリーはすっかり忘れてしまいました

宮澤 和俊
Kazutoshi Miyazawa

[研究テーマ]
人口経済学、公共経済学

が、この最後のセリフだけはずっと記憶に残っていました。そして、経済学を学ぶにつれて「死んだら裸になる」とはどういうことか考えさせられるようになりました。

上の例はばくち打ちの話なのでやや特殊に思えるかもしれませんが、似たような話はほかでも見かけます。たとえば、江戸っ子の気風の良さを表す表現として、「宵越しの金は持たない」というのがあります。今日稼いだ分は今日使う。明日必要なお金は明日稼げばよい。貯蓄はしない、という意味です。この言葉通り生きたとしたら、きっと最後は「死んだら裸になる」でしょう。外国でも、“que（ケ） sera（セラ）, será（セラ）（whatever will be, will be)” という表現（*1）があります。

経済学的手法で「ケセラセラ」を説明すると

経済学の分析で用いられるものの一つに「ライフサイクル仮説」があります。どういうものかというと、さまざまな経済現象を引き起こしているのは、突き詰めていけば一人ひとりの人間である。人間には寿命がある。人間は自分の限られた生涯（ライフサイクル）を最も素敵なものにしようと日々意思決定をしているのではないか、そして、そうした人々の意思決定の集合体として経済現象が現れるのではないか、という考え方です。

「死んだら裸になる」のはライフサイクル仮説で説明

---

*1【que sera, será】「ケセラセラ」。「なるようになる」という意味。アルフレッド・ヒッチコック監督のサスペンス映画「知りすぎていた男」（1956年・アメリカ）でドリス・デイが同名の曲を歌い、大ヒットした。

できます。自分の生涯だけを最も素敵にしようとするならば、死ぬときに資産を残すのは合理的ではないからです。お金を残すくらいなら、おいしいものをたくさん食べ、お酒が好きなら酒を飲み、芝居やコンサートに行って楽しい思い出をたくさん残せばいいのですから。この世に生を受けた奇跡に感謝し、生涯を素敵に生きようとすることと、「死んだら裸になる」ことは矛盾しないのです。

ライフサイクル仮説のメリットの一つは、少子高齢化などの人口動態変化が経済全体にどのような影響を及ぼすのかを予想できることです。たとえば、高齢化という現象を「退職後の生存期間が長くなること」と解釈しましょう。期間が長くなる分、全生涯における高齢期の重要度が増します。そのため、高齢期を素敵に送るためにはどうしたらよいかを考え、若い時の意思決定が変化するのです。たとえば、長い老後に備えて貯蓄を増やす人がいるでしょう。あるいは、貯蓄を増やすには生涯所得を増やした方がよいと考え、大学や大学院に進学しようとするかもしれません。また、長い老後を一人で暮らすのはいやだと思う人は結婚したいと思うかもしれません（逆に、今の配偶者と一緒に暮らすのはいやだと考えて離婚したいと思うかもしれません）。ほかにも、子どもが多いと教育費にお金がかかり過ぎて将来の自分の老後を素敵に送れない。子どもは２人までにしよう、と考えるかもしれません。

政府に対する注文も変化するでしょう。「私の大切な老後に年金は欠かせない。もっと給付を増やしてほしいという人もいるでしょうし、「保険料負担が重すぎて満足に貯

蓄ができない。自分の老後は自分で何とかするから、年金保険料を下げてほしい」という人もいるでしょう。こうした予想が正しいかどうかは、実際のデータを用いて検証することができます。予想とデータがある程度整合的であれば、ライフサイクル仮説には説明力があるといえます。

それなら、なぜ親は子に財産を遺す？

もちろんライフサイクルだけですべての経済現象を説明できるわけではありません。経済学の醍醐味の一つは、極めて単純な発想から生まれた「仮説」というナイフを手にして、混沌とした経済現象の一部分を切り取ることです。鋭利なナイフであれば、断面に真実が現れます。なまくらだと、断面には再び混沌が現れます。鋭利なナイフを増やし、真実の断面を積み上げていけば、いずれきっと経済全体を見通すことができるでしょう。

ライフサイクル仮説は鋭利なナイフの一本ですが、いくつか問題もあります。例えば、現実の人間の多くは「死んでも裸ではない」のです。しかも、遺産の総額は資産全体の中でも大きな割合を占めています。人はなぜこれだけの資産を、遺産として次世代に譲り渡しているのでしょうか。この点についてもいくつかナイフが用意されていますが、今のところ決定的ではありません。あなたも自家製のナイフを作ってみませんか。